
Under The Rose.

美月 小夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Under The Rose .

【Nコード】

N0289F

【作者名】

美月 小夜

【あらすじ】

『UnderTheRose .』昔、日記帳の最初のページに記した言葉。白い薔薇の下で話したお話は、内緒のお話。私だけの秘密の想い出のかけらを、そっと拾い集めてみました。

月に惑いて（前）

「いつでも、どうぞ。」

人懐っこい笑顔でそう答えてくれた彼の優しさに甘えて、その日も

自転車を走らせた。

こんな小さな町でも、夕暮れ時は仕事帰りの車で混み合う。

家路を急ぐのか、これから繁華街に出かけるのか、町の中心部の舗道には沢山の人たち。

その波を縫うように彼の場所へと向かう。

北の地方から出てきた彼は、私の住む町の大学に通っていた。

訛りはないが、北の出身と聞いて勝手に頷けるような赤みのある頬と、黒くて豊かな眉毛、そしてそれとは対照的に笑うとなくなる

目が可愛らしい感じの人だった。

ふとしたことから出逢い、色々と手伝ってもらうつちにいつのまにか

親しい友人になっていた。

入院しがちの私に、退屈しないようにと彼の好きな本や音楽を届けて

くれて、沈みがちな私の傍で他愛もない話を柔らかくちよつと低めの

声でしてくれたりもした。

行き詰まった私をお芝居を観に誘ってくれたり、海へと連れ出して

くれたりもした。

真昼の水族館、肩を並べて見上げた星空。

・・・素敵な想い出のかけら。

なんて書くと、お互いに惹かれあいハッピーエンド、めでたしめでたし

ってなりそうだけど、実はこの後私は彼に振られてしまうのであり

でもこの話は、まだそのずっと前のドキドキに胸を高鳴らせていた頃だから。

そんな未来を知ることもなく。

彼の優しさに、ただ甘えていた。

居心地がとてよかったから。

彼は仕送りもない国公立に通う学生だったから、週に何日か小さなビジネス

ホテルでフロントのバイトをしていた。

フロントのすぐ裏手には、畳張りの休憩室があった。

その窓は、ホテルの隣にあるマンションの駐車場のフェンスをよじ登れば

いとも容易く忍び入ることが出来た。

（なんか、犯罪みたい）

休憩室に灯りがついている。

すりガラス越しに、テレビのモニタが点滅している。
彼が、いる。

コンコンコン。

ノックすると、黒い影が近付いてきてするりと窓が開いた。

「こんばんは。来ちゃった。」

「いらっしやい、どうぞ。」

彼の優しい笑顔が出迎えてくれる。

そうしてフェンスを越え、靴と、手を彼に預けて畳に着地。
それから、いつものようにほんわかとした時間を過ごした。

「そろそろ、帰るね。」

彼が負担にならない時間で切り上げる。

本当はもっと一緒に居たいけど・・・。

来た時とは逆の手順で、外に出る。

寒い・・・。

思わず首を竦める。

秋深い夜は、思った以上に気温が下がっていた。
見上げると空には満月。

気を取り直して鍵を外し、サドルに跨がる。

「小夜子さん、待って。」

自転車を漕ぎ出そうとしたその瞬間、彼の声が追い掛けてきた。

「これ、よかつたら着て。ないよりは、マシだと思う。」

振返ると彼が、季節外れの白い上着を手にしている。

休憩室に置いてあった彼の私服らしい。

汚れててごめんね、と彼が手渡してくれる。

ありがとうと微笑んで、早速羽織りジッパーを目一杯上げた。
嬉しい・・・。

「今日は、満月なんだね。」

今気づいたかのように私も空を見上げる。

ほんのちよつと、時が止まる。

鼻の頭が冷たくなるのも気にならない程、至福の帰り道。
幸せだった。そんな些細なことだ。

月に惑いて（後）

家に着くと、出迎えた母がついさつき私に電話があったと告げた。それは、思いもかけない人からだった。

高校時代、大好きだった人。

帰ったら連絡が欲しいと、彼の言伝。

電話器の横のメモ用紙には、微かに記憶に残る彼の自宅のナンバーがあった。

私は、ちよつとためらいながら、受話器をとった。

短い呼び出し音の後の、懐かしい声。

「今から、逢いたい。」

その言葉に戸惑いながら、気がつくとは私は迎えに来た彼の車の助手席に座っていた。

変わっていない、彼。

大好きで、大好きでたまらない人だったのに・・・。

私は努めて平静を装って、お互いの近況を軽口を叩きながら報告しあった。

彼が車を走らせたのは想い出の公園。

予感はしていた。

湖のほとりの駐車場は、白い月明かりに皓々と照らされていた。

緑の芝生には月の霜が降りている。

湖の湖面だけがどろりとどこ迄も黒くて、遠くの街灯りがゆらゆらと揺れていた。

彼の口数が少なくなる。

彼は、変わっていない。

地元を離れて、東京の大学へと通っている彼。

一緒に居た頃はいつも我が儘だった。
いつも自分の都合のいい時だけ、子供のように甘えてきた。
その度に私は深く傷付いた。
でも、大好きだった。
彼は全然変わっていない。

言葉が、途切れた。

「や・・・先輩やめて。私、今好きな人がいるの。」

そんな言葉とは裏腹に、重ねられた唇が昔を想い出す。

「なんで。今さら・・・こんなこと。」

遠い記憶になり切れないその腕を引き離して、窓ガラスに頬をつける。

泣きたいくらいに、冷たい。
見上げると頭上に満ちた月。

「・・・月のせい、かもな。」

倒していたシートを起こしながら、彼が独り言のように呟く。
出来ることなら、ふらふらと惑うこの思いを私も月のせいにしたかった。

「そうね、多分。月のせいね。」

頬が痛くなっても、私は窓ガラスから離れることが出来なかった。
彼の方を今振り向いてしまったら、また堂々巡りになりそうだったから。

黙って月を見ていた。

つい先程迄、幸せな気持ちで自転車に乗って同じ月を眺めていたことが、嘘のようだった。

夢のように遠く感じた。

薄氷のような月の切れそうな程の輪郭が少し滲んだ。

それが何故かは、考えたくなかった。

月がそんな私を、ただ冷ややかに見下ろしていた。

漆黒の湖に沈めた遠い記憶。

月だけが、知っている。

今宵は、満月だから。

あの夜の、思い出のかけら。

どっちが痛い？

例えば、紙で指を不意にスパンと切ってしまうのと。

じわじわじわと何かに擦られたりして、気がついたらあれ／＼結構痛いもっていうのと。

どっちが痛いんだろう？

まあ、どっちも”痛い”には変わらないのだが。

後々まで痛いのはどっちかなあ。

誰？ それはその傷ができた時の状況や程度による。

なんてかたいこと言ってるのは！

これは例えだからね、あくまでも。

だからそういうことは、置いておいて。

なんでこんなことをいきなり言い出したかというと。

別にね、いきなりなわけじゃないのよ。

ずうっと前から常々考えてはいたことなんだから。

これは、”終わり方”の例えなのよ。

高校生ぐらいの時の恋愛って、

「つき合って下さい。」

「はい。」

からのスタートじゃない？ ほとんどの場合は。

でも大人になるに連れて、”気がついたらいつのまにか・・・あれ

？　これってつき合ってる？”　っていうような、はいはいここがスタート地点ですよっていうラインを明確にしなかったりするじゃない。

それが自然で心地いいものになるときもあるのだけれど、でもそれゆえに”終わり”を迎える時が曖昧だったりする確率も高くなるわけ。

なんか事勿れで、そのまま傷つけないようにフェイドアウト。よく聞く話だよねえ。

身につまされた人もいるでしょう？　ここまで読んで。（苦笑）

でも、本当にそれって傷付かないことなの？

ちよつと疑問。

それなりに、一緒に過ごす時間があつたわけだから、全く傷付かない&傷つけないわけにはいかないでしょう？

ずるずるじわじわ、後味の悪さだけを引きずりながら、そのままなかつたことにしちゃうなんて、やっぱそれはまずいだろう。

随分と前にあつたんだ。

”ずるずるじわじわ”の終わりが。

そしてそのあとしばらくして、今度は”スパン！”の終わりが。

”スパン！”　って終わりの方は、”ずるずる”の予感がしたから、ええ〜い！！こんな気持ちもう厄介だ！ってな具合に自分から”スパン！”を選んだんだけど。

”スパン！”の終わりは自分で想像していたより、その瞬間は痛かつた。

まさに、紙で不意に指先を切ってしまったみたいに。

ジンジンと傷口が疼いて熱を持つちやうような痛み、だった。

でもね、そのかわり治るのも早かつたよ。

”スパン！”の痛みを経験して、初めて”ずるずるじわじわ”が本当はどんなに

傷付いて治りが遅いかわかった。

鈍痛な分、痛みから気持ちそらしちゃうんだよね、きつと。

”スパン！”も辛いけどね。

いくら表面的に傷口が塞がったって、嫌なお天気が続いたらなんとなくじくじくするような後遺症は残るけど。

それはどっちでも同じ。

どっちを選ぶかは、その人次第。

それから、相手次第。

かもね。

そんなこんなの、想い出のかけら

鞆の中から

20歳の頃、密かに好きだった人と二人だけでお食事のチャンス！もう、内心ドキドキしながら、一生懸命お洒落をしていそいそと待ち合わせの場所へ。

約束の時間に、指定の書店へ入るともうすでに彼は来ていた。すらりと背の高い彼は、沢山の本を読む人達より、頭ひとつ出ていた。

雑誌を手にする彼の後ろ姿に妙な違和感。

なんだか、小旅行にでも行ってきたかのような黒い大きなトートバックを肩から下げていたせいだった。

その姿がちよっと不自然だったが、彼はまだ大学生だったのできつと色々必要なものが入っているのだろぅとすぐに思い直した。

そして、私に気付いて振り返った瞬間の、あの優しげな笑顔にすぐに有頂天になって、バックの事など一瞬で忘れた。

「おいしいお店があるんですよ」

と連れて行かれたこそは、食堂に毛が生えたようなこ汚いお店・・・。

でも、その店のおばちゃんを感じよくて、出てきた焼き魚定食もおいしくて、なにより憧れの人とお食事できるだけで最高だったの。

（若かったなあ）

すると突然、彼が照れくさそうに

「プレゼントがあるんですよ。」

と大きなバックに手を入れてそこから取り出したものは

なんと、黄色いチューリップの花束。

嬉しいのより先に、『なんで花束をバックの中に入れていたの？！』っていう思いが私の中ではぐるぐる。

それでも、彼が好きっていう気持ちがあるうちは『大好きな人から花束もらった』これは脈あり？』ってひとり勝手に喜んでいただけ。（苦笑）

彼と自然に連絡をとらなくなってから、風の噂で聞いた話。

実は彼はずっと好きだった人の車のフロントガラスに毎日バラの花を一輪、こっそりおいていたらしいとのこと。

結局、その人は「花を贈れば自分になびく」という方程式がずっと前から出来上がっていた、ということだったのね要するに。（その彼女にはストーカーと思われるいたらしい。）

心ときめいていた自分がおかしいやら、哀しいやら。
そんな昨日の黄色いチューリップのお話。
むかし

あの感動は、誰のもの？

『もらって嬉しい贈り物。』

そんなキャッチコピーに触れたら、ふと思い出した。
ものすごく、ものすごく嬉しかった贈り物のことを。

私が中学1年の時だから、もうかなり遠い昔の事。

私は、社会科の先生が大好きだった。

クラブ活動の顧問でもあり、よくその先生とは話をした。

先生は当時28。奥様がいた。

その頃の15歳の差は大きかったなあ。

ものすごく大人にみえたっけ。

今想い出すと、先生はけっして男前ではなかった。

なぜ好きになったのか、今は想い出せない。なんでだろう？

だけど、とにかく好きだった。

同じクラスに小学校の6年間ずっと好きだった男の子がいたのだが、
いつの間にか私の中の特等席はその先生に入れ替わっていた。

気がついたら好きだったのだ。

その頃の恋とはそういうものかもしれない。

そんな私が、何かのはずみで先生とある約束をすることになった。

1学年の間、社会のテストで90点以上をとり続けたら先生が褒美をくれるというのだ。

そんな事が他の生徒や先生にバレたら大変な事になっていたろうが、上手い事誰にもばれずに私達だけの秘密を持つ事が出来た。

それから私は、とにかく猛勉強した。

ただひとり先生に認めてもらいたいために。

何かは知らされていない、魅惑のご褒美を先生からもらうために。

11月に入り、テストもあと数回になった。

あと数回。これを通り切ればご褒美がもらえる。という時に、私は病気で2ヶ月近くも入院をしてしまった。

もうダメだ。。。そう思うだけで、涙が出て止まらなかった。案の定、約束は守れなかった。

落ち込んで目もあわせられない私の肩を、先生が叩いた。

「・・・仕方がないな。でも良く頑張ったから、これをお前にやるよ。特別だぞ。」

そう言って、色褪せた8冊の文庫本を私に手渡した。岩波文庫の海外の長篇小説だった。

「オレが大学の頃読んで、感動した本だ。これをお前にやるから、大切に読めよ。」

嬉しかった。もう羽根が生えて飛んでしまふかと思うくらい嬉しかった。

正直、『ああ無情』のような路線の話を8冊に渡って読むのはしんどかったが。（苦笑）それでも必死に読んだ。

ようやく8冊目を読み終え、何気なくあとがきに目を通して見ると、一番最後のページに鉛筆でなにやら書き込んであるのを見つけた。ドキドキしながら、その文字を指でなぞりながら読んでみる。

『昭和 年、暮秋。

この感動を、貴女に贈る。』

複雑な気持ちだった。

子供な私にでも、そこに書かれた名が奥様の名前である事は察しがついた。

よせばいいのに、後日「あれって奥さんの名前？」って茶化すように聞いて、「そうだ」と言われてしまった。バカだなー。

今、先生と同じような年齢になって、まっ先に考えてしまうのは、

（あの本は奥様に贈ったらしきもののなのに、それを教え子にあげたりして、もめたりしなかったのだろうか？）

と言う事だ。

私だったら・・・やっぱり、嫌だよな。

そんな角度で考えてしまうのは、私が歳をとったということなのかしらねえ。

でもやっぱりなんだかんだ言っても、あの本は私にとって忘れられない贈り物ですよ。

ねっ、先生！

真昼の水族館

遠い遠い夏。

その水族館は、海辺にあった。

当時大学生だった彼を、電話で呼び出した午前中。

寝起きの彼は、シャワーを浴びる時間だけちょうどいと受話器の向こうでそう言った。

1時間後、彼は私の待つ駅のロータリーに今にも壊れそうな赤いカローラでやって来た。

エアコンもない、左側のドアミラーが壊れていて使い物にならないオンボロカローラに乗って海まで向かった。

どちらが、「水族館に行こう！」と言い出したのかはもう忘れてしまった。

そのくらい遠い想い出。

とにかく窓を全開にして、熱いアスファルトの照り返しを含む風を感じながら、カーステレオのボリウムをあげて二人で鼻歌混じりにドライブをしたのを覚えている。

昼下がりの水族館。

平日でまだ夏休みの始まる少し前だったせいか、ほとんど人気のない館内。

ちよつと湿ったような空気の薄暗い廊下は、まるで時が止まったような感じがした。

四角いガラス越しに、ゆつたりと泳ぐ魚たち。

私は、巨大水槽の中を泳ぐ熱いところに住む淡水魚が好きだった。

まるで化石のようなその大きな身体をほとんど動かすこともなくのっぺりと漂うその姿を見るのが好きだった。

そんな私を彼は、どんな風に思っていたのだろうか？

2階建ての建物の屋上には、ペンギンがいた。

決まった時間にショーが行われ、ペンギン達がよちよちと滑り台を滑ってみせたりして観客から拍手をもらっていたりした。

そのペンギン達がいるところから少し離れたところに、海を見ることのできる展望場があつてそこで海をみながら彼が言ったこと、今でも忘れない。

強い海からの風にあおられた髪が口や目の中に入る。

二人で屋上を囲む壁にまるでしがみつくかのようにして並んで海を見ていた。

「大学が終わつたら、ここを離れようと思って。」

彼がそう言った。

耳の中で風がごうごうと音を立てていてよく聞き取れない。

「え？」

「ここを、大学が終わつたら離れようと思っている。」

彼の顔を覗き込んだ私に、もう一度彼はさっきより少し大きな声ではつきりとそう言った。

それから彼は自分の実家のこと、そしてなりたい職業のことなどを話してくれた。

それをうなずきながら聴く私は、どうしようもない淋しさを感じていた。

気を抜いたら、ふっと涙が滲んできてしまいそうだった。

一生懸命、身体に力を入れていた。

それは、風に吹き飛ばされないようでもあつたし、泣いてしまわな

いようにでもあった。

彼の描いている未来に自分の入り込める場所はない、そんな考えだけが強い風にも決して吹き飛ばされることもなく、ただ、そこにあった。

海も、空も、碧^{あお}かった。

どこまでも、どこまでも碧かった。

せめて今この瞬間だけは、一緒に同じ場所で同じ海を見て同じことを感じていることだけは決して忘れないようにしよう。
力を込める身体に、更に力が入った。

・・・そこで、私の記憶はぷつぷつりと途絶える。

その後、どんな話をしてどこをどんな風にして家まで送ってもらったのか食事はしたのか夕方まで一緒にいたのか、なにも覚えていない。

笑っちゃうくらい、想い出せないのだ。

そのくらい彼の言葉が切なかったってことなのかな。

その水族館は、今はもう ない。

人生最大の失敗

あちゃー！！

つていう失敗をした料理のお話。

あれは高校の頃。

母が帰るまでに何か作っておいてあげようかなという気になったので、さて何を作ろうかと考えた。

その日は寒かった。

急に、和風のスープが飲みたくなった。

そこで、たまねぎやらサヤインゲンやらをお鍋に入れて、コンソメを入れてコトコト煮込んだ。

しばらくして、いい匂いがお鍋からしてきた。

ちよつと味見を試してみる。

うーん。

塩気が足りないかなあ？

塩を少しだけ足してみる。

そうだ、お醤油も香り付けにちよつとだけ足しちゃえ。

私の料理は、目分量。適当なのだ。

計量スプーンやお料理の本よりも、自分の舌だけが頼り。

いつも醤油のボトルが入っている戸棚に手をのばす。

あった、あった。醤油のペットボトル。

見もせずに、手の感覚だけでそれを醤油だと確認する。

ほとんど無意識に、蓋をあけ中の液体を湯気の立った鍋の中へ。

とぼとぼとぼ・・・。

あれ？　なんか変だ。

お醤油の匂いじゃないぞ？

慌ててボトルに目をやる。

中に入った液体は、醤油とは似ても似つかない、赤茶色っぽい透明なものだった。

!!!!!!!!!!!!!!

ラベルには、お漬け物の絵が描いてある。

しかも、赤い字で大きく『一夜の夢』と書いてあるじゃないか。

うお~~~~、しまったああああ。

速攻で鍋を持ち上げ、水切りざるに煮立った具だけを残し汁を捨てた。

流しに、きゅうりの浅漬けをあつためちゃったような臭いが充満する。

どうしようかなあ。たまねぎもうないんだよな。
もったいないので、取りあえず洗ってもう一度その具を茹だった鍋
に入れて、スープを作ってみた。
すぐ気がついて鍋から出したから大丈夫、よね？

・・・だめだった。

ものの見事に、たまねぎやらサヤインゲンやらには、あのかぐわし
い臭いが移ってしまっていたのだ。
こんなの食べられるかー！

あんなにひどい失敗をしたのは、あれが初めてでした。
でも安心して。

もうあんな失敗はしていないから。
って、普通はしないだろう！って怒られそうだな。
てへへへへ。

ま、御愛嬌！ ダメ?????

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0289f/>

Under The Rose.

2011年1月23日15時16分発行